

成人における実父母との似より感

—女子学生をもつ母親と父親について—

秋 山 幹 男

The *Similarity* between Adults and their Father/Mother

—On Parents of Female Student—

Mikio Akiyama

1972年からスタートした「親子の似より感」の研究は、1994年にその方向づけができた。同一視 identification と 同一性 identity を同一線上に捉えるのではなく、その間に隙間を開け、似よるとズレるという視点から考えを深めていったからである。そのうちに、もう一つ上位の概念となる『似よることとズレること』が立ち上がった。その後、これをベースにした一つの理論モデルを打ち立てたことから、この一連の研究がさらに一歩前進したと言える(2000, 2001, 2002)。それは、人生の第③段階にある両親と第②段階の女子学生との間にみられる性格認知のかかわり方に焦点を絞ったことによる。

これまで追究してきた親子の似より感は、実際の生活場面における父親と母親との似より(またはズレ)をそのまま反映しているものではないということも分かってきている。母親の胎内で芽生えた自分は、両親の遺伝子を半分づつ受け継いだ存在者である。その後誕生してからは、母親を中心とした人間関係の愛情という守りの中で成長を遂げながら、早い時期に基本的信頼感/不信感というものを身につける(Erikson, E.H. 1977, 1980)。これが己独自の人と人とのかかわり方の土台となり、この世における唯一の人格が生涯をかけて形成されていくのである。まことにもって不思議なことなのだが、似より感大群に位置づけられた女子学生たちは、両親と自分という三者の性格認知において似ているものが多いと判断している。もちろんこれは、内向性(F1)・自己顕示性(F2)・誠実性(F3)・明朗性(F4)を構成する42項目とその他の性格項目で捉えた範囲内のことである(誠実性の項目群は、さらに持続性と愛他性という下位分類も可能である)。欧米に広くみられるようになってきた家族形態には、血縁関係でない家族の存在がある。「親子は血がつながっているから〇〇」という考え方とは違う真実が、この親子の似より感研究からも垣間見えてきている。それは、似よることとズレることを視野に入れて捉え直すことにより可能になったことなのである。Aさんは、三者共通区分(区分③)にたくさんの項目が入る典型的な似より感大群の代表者のような方である。しかし、青年期以後30年にわたる実際の暮しにおける両親との似より関係は、父親からの影響を強く受けている存在者であり続けたと受け止めている。このように行動と認知が違う・ズレているものは、心理学の研究対象としてはあまり良くないと一方的に断言し否定するのではなく、この一見矛盾したように見えるものの中にこそ隠された真実が潜んでいると考えてみることにしたらどういうことになるだろうか。きっと、新しい研究への入口が見えてくる。いや、見えてきたのである。

われわれは、人間の中で生活する。生まれる前から、個性化と社会化という課題を背負いつつ日々同時進行で、その成果を自己というものの中に組み込みつつ、時間をかけながら築き上

げてきた。一生をかけての私→〈私〉→《私》の追求である。人生の第②段階までに〈私〉の中に創り上げられた親子の似より感は、その個人が生活を通して身に付けてきた対人的なかかわり方に大きな影響力を持っている。このことを表す心理学的用語を探すとすれば、それは霜山(1978)のキーワードにたどり着く。「その人のまわりに立ちこめた雰囲気」と「適正距離 proper distance」・「まなざし」である。上述した、個性化と社会化の目指す人生の第③段階における一つの心の到達表現である。

親子の似より感研究は、女子学生を対象に30年間の積み上げがある。この流れの中で、一方的に捉えた娘の似より感だけではなく、親との双方向からの分析の必要性をも随分と以前より考えていた。このことを調べるための最初の調査は、1980年と1984年になされた。入手した回答はかなり多かったのであるが、娘と両親のデータが揃っていたものは83組であった。これについては、やっとのことで1999年論文化にたどり着けたが、随分と時間をかけ試行錯誤を繰り返してまとめ上げた。一応満足のいく分析はできたのであるが、この作業と並行させながら大きく膨らませていった考えは、娘達の両親が各々の実父母とどのように自己の性格認知を絡ませてきているのかということであった。また、そのことがどのような形で自分達の家族像・家庭イメージに影響を及ぼしてきているのだろうかということである。1994年にまとめることができた現状とパースペクティブで、自分なりに気持ちの区切りがつき、研究の焦点はいよいよ人生の第②段階と第③段階に絞込まれてきた。研究の対象者は、女子学生から幼稚園児をもつ20歳後半から30歳前半が中心の若い母親(1986年調査)、そして、女子学生をもつ壮年期(中年期)の母親(1990, 1991年調査)へと広がっていく。ここでもゆっくりと時間をかけながら(実際には相当焦りながら)詳細にわたる検討を加えつつ、学会発表に順次持ち込み、他者の意見をも参考にしながら自分なりの考察をしてきたのである。

まずは、実父母との似より感の受け止め方の違いが、若い母親の幼児に対する養育態度や自己とわが子(幼児)の性格認知にかなり大きな影響を及ぼしていることを確かめることができた(2000)。一方、40歳代を中心にした壮年期にある母親については、114人分のデータが手元にある。三度学会発表(1998a, b 1999)をし、この度の論文化に持ち込んだ。この息の長いライフワークと歩を一にさせながら、発達臨床学的な実践活動も続けてきているのであるが(その経緯紹介 1993, 1996, 1998, 2003)、これらを絡ませることである一つの真実に触れることができたという実感を持つようになった。21世紀を迎えるにあたり、これまでの気が遠くなるような調査研究に区切りをつけるべく、最後の調査を実施した(2000年, 2001年)。ここでは、かねてからの念願であった女子学生をもつ父親(45歳~50歳前半が中心)に対しても調査協力を依頼し、娘(女子学生)-妻-自分自身と実父母についての似より感のデータを手にすることができた。トータルすると13の組合せになるのだが、その全てが揃った回答数は67組である。これはなかなか得難い知的財産といえよう。この最新の女子学生をもつ両親の実父母との似より感についても、一応2001年と2003年に学会発表を済ませた。今回は、この結果をも取り込みまとめ上げている。

両親が認知している実父母との似より感が、夫婦となり二人で創り上げてきた家族のイメージに色濃い影響をもたらししているということ、少しでも証明できたらと考えている。

本研究の目的

人生第②段階と人生第③段階の研究

- ① 娘(女子学生)をもつ母親が実父母と家族の似より感をどのように把握しているかを調べ

る。

- ② 父親と母親の実父母との性格認知の違いが家族間の性格認知にどのような影響を及ぼすのかについて、似より感をもとに調べてみる。

方 法

調査 I 対象者 学生の協力者は 158 名であったが、本研究に使用できた女子学生を持つ母親の実数は、114 名となった（45～49 歳を中央値にした 40～59 歳の年齢幅）。

実施年月 1989 年 12 月／1990 年 12 月の授業時に調査用紙の入った封筒を配布し、1990 年 1 月／1991 年 1 月に回収した。

調査内容 4つの性格認知因子（F1 内向性 12 項目、F2 自己顕示性 9 項目、F3 誠実性 14 項目、F4 明朗性 7 項目）とその他よりなる 56 項目の性格調査を使用した。母親に依頼した評定の対象は、「実父（50 歳すぎ頃）」「実母（50 歳頃）」「自分自身」「夫」と「娘（調査用紙を持ち帰った）」である。女子学生にも同じ 56 項目の調査用紙に回答をしてもらったが、その際の評定対象は、「自分自身」「母親」「父親」であった。評定対象ごとに頁をめくりながらチェックしていく。各項目は 5 段階で評定された（資料参照）。

データの処理 1. 女子学生をもつ母親とその実父母の性格 : 4つの因子について因子別に得点化がなされた。因子を構成する項目の得点を加算し、項目数で割った値を使用する。得点は、5.00～1.00 の範囲に納まる。女子学生（娘）の場合も同じである。2. 母親と実父母との似より感 3 群の抽出 : そう思う（選択肢 2）は「はい」、そう思わない（選択肢 2）を「いいえ」、どちらも言えないを「？」と置き換え、3 件法にする。この「はい」と「いいえ」で選択された項目を、Fig. 1 の七区分の中に入れていく。？の判断がなされた項目は、外してカウントしない。その区分③に入った個数の多少によって似より感大・中・小という 3 群を抽出する。

この処理の仕方は、母親が捉えた夫と娘と自分自身、娘の場合も同様である。

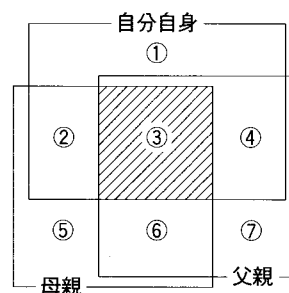


Fig.1 七区分表示図

調査 II 対象者 女子学生をもつその両親（91 組）。母親の年齢は中央値 48・49 歳（レンジ 39～57 歳）、父親の年齢は中央値 51 歳（レンジ 41 歳～65 歳）であった。協力学生数は 100 名。

学生のきょうだい構成と出生順位について：一人っ子 5、二人きょうだい 47（姉 27：同性 12、異性 15／妹 20：同性 6、異性 14）、三人きょうだい 42（第一子 17、第二子 13、第三子 12）、四人きょうだい 6 / 第一子（長女）51、第二子 34、第三子 14、第四子 1

実施期日 1999 年 12 月／2000 年 12 月の授業時に配布（封筒に入れて）し、2000 年 1 月／2001 年 1 月に回収した。

実施内容 女子学生をもつ両親に対して、各々の実父（50 歳すぎ頃）と実母（50 歳頃）、自分自身、配偶者（夫／妻）と娘（学生）の 5 人を調査の評定対象とした。同時に、娘に対しても冬休み期間中に父親-母親-自分自身の似より感調査、自己意識調査（数種類）に協力してもらった。項目内容は調査 I と同じであったが、その他の項目を 14 項目から 6 項目に削減させている。

データの処理 1. 父親と母親の 5 つの評定対象に対する性格認知 : 調査 I と同じ得点化がなされた。2. 父親と母親の実父母との似より感と自分自身-配偶者-娘の似より感 :

七区分表示を用いて抽出することは、調査Iと同様である。ただし、群分けにあたっては、その他の項目を除外し4つの因子を構成している42項目に絞り込んだ(56項目を42項目でみていく場合の順位相関は0.97であることは以前に確かめてある)。また、両親のデータが全て揃っているのが67組のため、3群だけではなく平均値以上(大群)と平均値未満(小群)の2群にした上で、似より感の比較検討をも試みることにした。

結果と考察

I. 母親における実父母と「夫-自分-娘」の似より感3群の関係性

— 1990/1991年のデータより —

Iの1. 似より感3群の抽出

母親が自分と実父母、自分-夫-娘について三者別々に回答したデータは、一括して処理すると七区分のいずれかに納まる。このうちの区分③に入った項目数で、似より感3群は決定される。今回の結果は、Fig.2のごとくである。自分と実父母における似より感「大」群は上位31.6% (36人)、「小」群は下位32.5% (37人)そして「中」群は残りの36.0% (41人)で構成されている。ついで、自分-夫-娘についてみた似より感大群は33人、中群45人、小群36人であった。

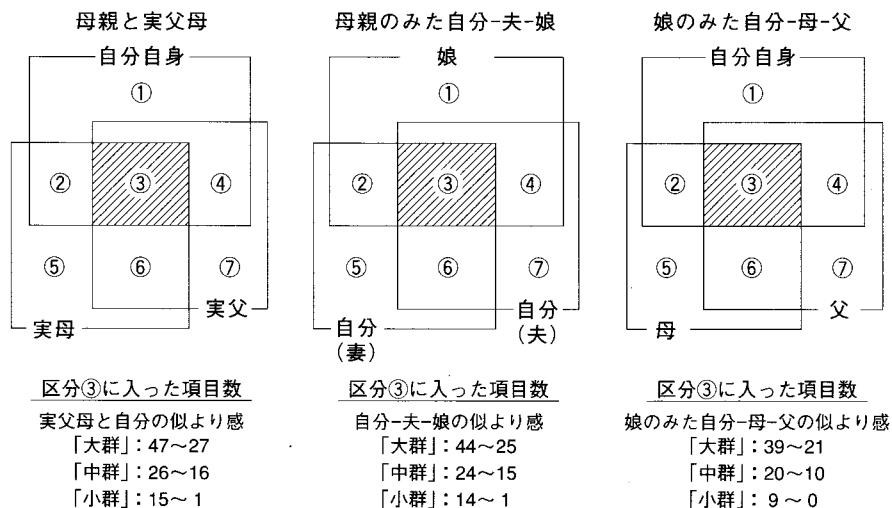


Fig.2 七区分表示と区分③に入った項目数による群分け

娘が捉えた自分-母親-父親の似より感3群の内訳は、大群は32人、中群47人、小群35人となっていた。

Iの2. 成人期の母親が捉えた実父母との似より感と家族内三者間(自分-夫-娘)

の似より感とのかかわり方

成人女性(女子学生をもつ母親)の実父母との似より感と彼女のみている自分-夫-娘(学生)の似より感の関係性をみたのが、Tab.1である。とても不思議なことなのであるが、なぜか23人・11人という人数の一致が得られた。

母親が認知した実父母との似より感が、家族の似より感に大きな影響を及ぼしていることがよく分かる。「大群」は大群(23人)・中群(11人)という出現である。「中群」では中群(23人)・小群(11人)、「小群」においては小群(23人)・中群(11人)というかわり方であった。全く反対の夫婦と家族の認知をしている母親は「大群」・「小群」とも2人とか3人ということで非常に少ない組合せであった。

家族をみつめる母親の性格認知において、このようにはっきりとした差が出たということは、実父母との間で培ってきた親子の似より感というものが心内化と継承化のプロセスを辿りながら、意識の中で大きな位置を占めていることを示していると言えるのではあるまいか。ここには、一定のパターンが存在しているかもしれない。この考えは、あくまでも4つの因子でみた性格の似より感がベースとなった研究から得られたものであるという限界はある。

Tab.1 実父母と自分の似より感と夫・娘と自分のそれとの関連性

実父母と自分(母)	娘(大学生)・夫と自分(母)	n
「大」	大	23
「大」	中	11
「大」	小	2
「中」	大	7
「中」	中	23
「中」	小	11
「小」	大	3
「小」	中	11
「小」	小	23

Iの3. スクウェア・グラフを用いた「大群」と「小群」の4因子別得点の比較

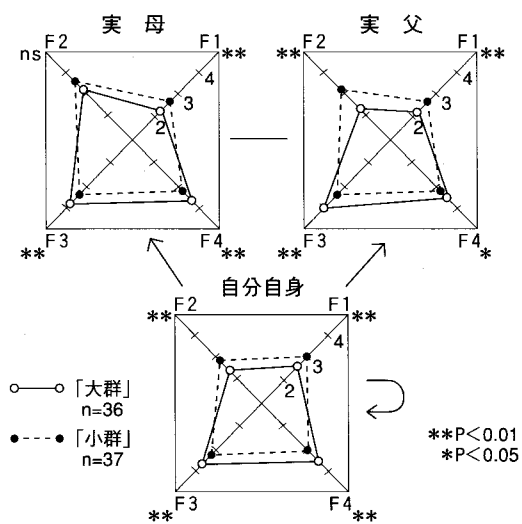


Fig.3 3 評定対象別にみたスクウェア・グラフ
—「大群」と「小群」の比較—

スクウェア・グラフは、1997年の論文で考案されたものである。これまでは、評定対象ごとに4つの因子別得点と標準偏差(\bar{X} , SD)を出し、表で表してきたので横一線の比較となりとても煩雑であった。これに比べて Fig.3 のような表し方は、一目で理解できる。実父母と自分自身の似より感「大群」と「小群」の母親の \bar{X} を対角線上に示したものであるが、三者の受け止め方にはっきりと有意な差がでていることが分かる (** $P < 0.01$, * $P < 0.05$)。「大群」は「小群」と比べると、実父、実母、自分について F1 内向性と F2 自己顕示性が低い得点を出し、F3 誠実性、F4 明朗性で高い得点となった。評定対象「実母」の F2 自己顕示性では、有意な差は出なかったが、その他は全てにおいて有意差が得られた。

Iの4. 似より感「大」・大群と「小」・小群による比較

この二群の F1~F4 の平均値 (\bar{X}) を、5人の評定対象別にスクウェア・グラフ上に示したものが Fig.4 である (t検定を使用)。「大群」(n=36)と「小群」(n=37)と比較した場合、今回は23人づつに絞り込んだために有意な差をみせなくなった因子があった(実父: F1, F4 / 自分: F1)。また逆に、ここで有意差が出てきたのは、実母の F2 自己顕示性である。

次に、家族の構成員である夫と娘(大学生)を4つの因子別得点で見比べると、夫について同じく F1 内向性と F4 明朗性で群間差は消失している。娘をみる認知においては、F4 明朗性を除いて有意な差が得られた。全体を通してみると、5つの評定対象に対し「大」・大群の母親

の方が、「小」・小群の親よりも F2 自己顕示性では低得点、F3 誠実性では高得点となった。実母と自分に関しては、ここでも F4 明朗性において有意差が出てきた。

母親（妻）の実父母との関係性（似より感）を絡ませて捉えた家族に対する受け止め方には、「大」・大群と「小」・小群の間にはかなりとした差が出ている。自分の内に取り込んだ実父母像の違いが、自己や家族の性格をみるときにも影響し、ほぼそのまの似より感の形で（下位項目での変動はあったとしても）、大きなウェイトを占めていくということが明らかになったと言いたい。この 1990/1991 年の調査では父親のデータは入手しなかったため、2000/2001 年に改めて追加の調査を実施したのである。

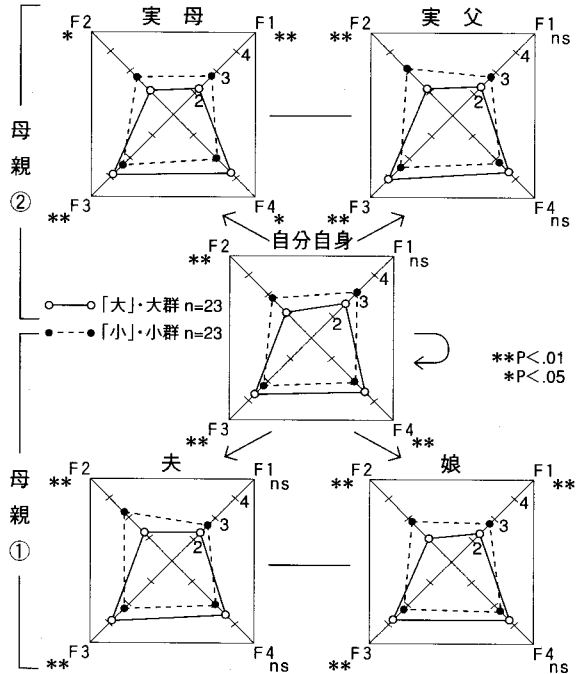


Fig.4 「大」・大群と「小」・小群の母親の比較
— 群データ —

Iの5. 事例をもとにした一つの試み

二群（「大」・大群と「小」・小群）の間には性格認知の上で大きな違いのあることが確認された。

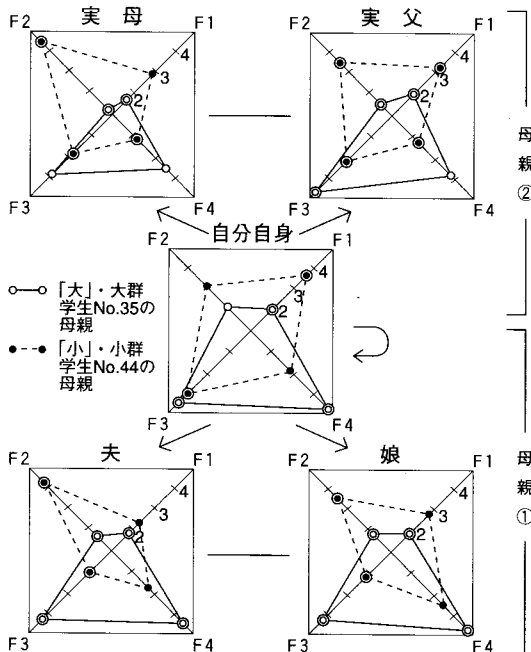


Fig.5 学生 No.35（「大」・大群）の母親と学生 No.44（「小」・小群）の母親の比較 — 事例データ —

そこで、さらに個人別にもその特徴を追ってみることにした。発達臨床学的には意味のあることだと考えられる。学会発表においても、春日 喬氏からこのような研究の接近は臨床に使えるという賛同をいただいた。ここでは、二群を構成している一人ひとりについてグラフ化したものの中から取り出した2人の事例を一緒に図示してみた。+1SD以上あるいは-1SD以下の得点は、二重丸にすることによって、全体の中での位置付けも併せて出来るように工夫をこらしている。このスクウェア・グラフで比較検討を試みるのは、とても視覚的に見やすくなり便利である。

この「大」・大群の学生 No.35の母親と「小」・小群の学生 No.44の学生の母親の比較からは、さらに面白い群間の特徴の相違が鮮明に映し出されてくる (Fig.5)。

「全体の中で個を生かす」という、基礎と臨床の接点探し、つまり、橋渡しへの努力は、38年にわたる息の長い取り組みなのであるが、少しづつは夢の実現に近づいてきているようにも感じ出している。

II. 母親と娘の似より感のかかり方

— 1990/1991年のデータより —

ここからは、Fig. 6の図式のように各々の関係性を母親②と、母親①、娘という表示でまとめていくことにしたい。女子学生（娘）の認知とその母親の似より感を、双方向から見つめながら追究していく。いよいよ“面”で捉えるという研究の開始である。

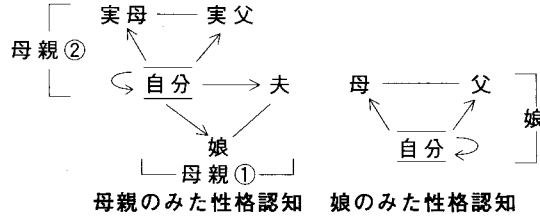


Fig. 6 母親・娘のみた性格認知

IIの1. 母親①と娘をもとにした群分け

群分けの結果は、Tab. 2のようになった。母親が実父母との似より感でみせた程緊密な関係ではないが、予想を上回るかなり強い結び付きが確かめられている。考えていたよりも母①大・娘小や母①小・娘大という組合せの親子は少数の出現である（21.2%、19.4%）。さらに、これを母親②との関係でみると、その特徴がよりクリアーになる。

Tab. 2 母親①と娘をもとにした群分け
— 母親②の出現状況も —

母親①	娘	n	母親②		
			「大」	「中」	「小」
大	大	14	9	3	2
大	中	12	10	2	0
大	小	7	4	2	1
中	大	11	1	7	3
中	中	20	6	9	5
中	小	14	4	7	3
小	大	7	0	3	4
小	中	15	2	5	8
小	小	14	0	3	11

母①大・娘小や母①小・娘大という組合せの親子は少数の出現である（21.2%、19.4%）。さらに、これを母親②との関係でみると、その特徴がよりクリアーになる。母①大・娘大/母①大・娘中の人達は、母親②でも「大」となる組み合わせが多かった。これに対し、母①小・娘小/母①小・娘中の者達は、その逆の母②「小」になっている。学生である娘においても、継承化のプロセスは進行し始めているように思われるのである。

IIの2. スクウェア・グラフでみた4因子の比較

母親と娘が評定した計8人の対象者を一括図示し、“面での分析”を試みてみた。一度に（同時に）扱う対象が多いので大変ではあるが、考案したスクウェア・グラフで見比べるとかなり見取りやすくなる。Fig. 7は、母親①大娘（大・中）群と母親①小娘（中・小）群で各々4つの因子について比較したものである（t検定）。

母親②①「大」・大娘大群（n=9）と母親②①「小」・小娘小群（n=11）と比較した場合、人数が少なくなるため母親のみた夫のF3誠実性、娘のF3誠実性、娘の捉えた父親のF2自己顕示性の有意差が消失した。反対に有意な差が出てきたのは母親のみた実母のF4明朗性であった。

この図をみて分かることは、2群を比べると母親の場合は、一貫して主にF2自己顕示性とF3誠実性で差をみせた（ただし、実母に関しては母親②大母親①大群と母親②小母親①小群で出

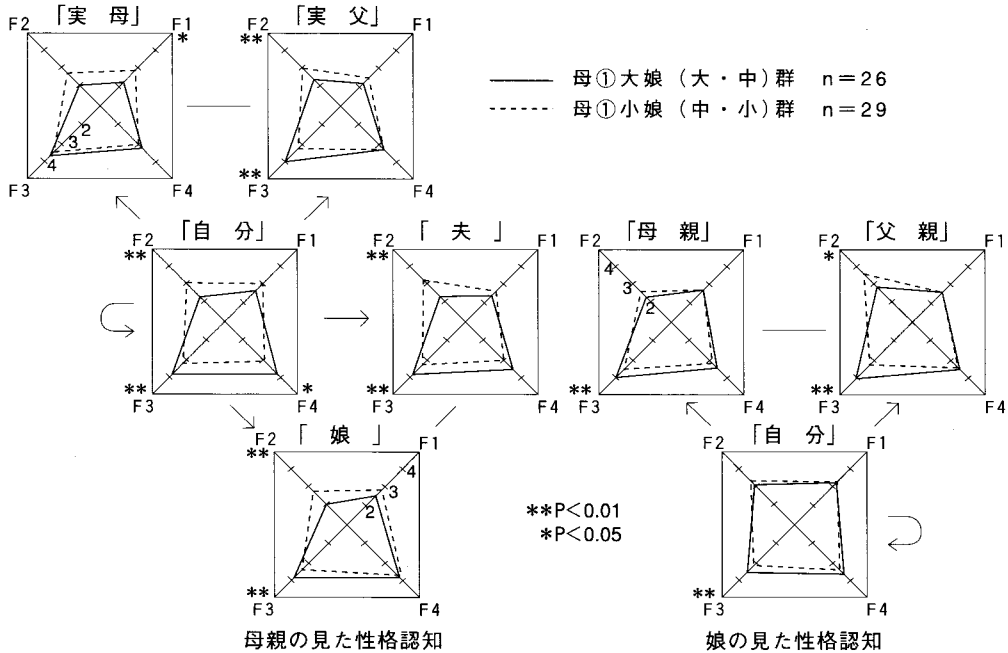


Fig.7 母親①大娘 (大・中) 群と母親①小娘 (中・小) 群のスクウェア・グラフでの比較

ていた有意な差は消えている)。少し複雑にはなるのだが、これらの結果を詳細に見比べていくことにより、母親の身近な(だった)人に対する性格認知と、娘(学生)のそれとがどのように絡み合っているのかが、視覚的に追究できる。

III. 学生をもつ両親の実父母と「自分-配偶者-娘」の似より感

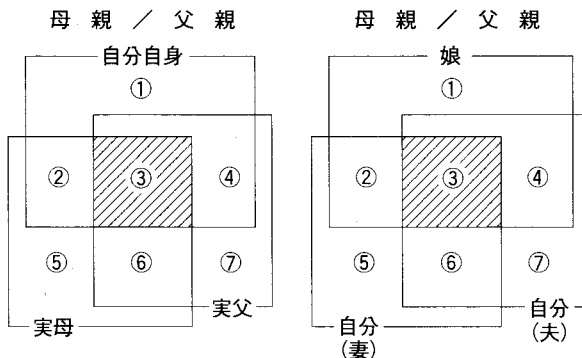
— 2000/2001年のデータより —

ここからは父親の捉えている実父母の似より感と家族のそれとを分析に取り込むことにした。父親の結果をこれまで追究してきた母親と比較させることで、両親が醸し出している家族の雰囲気を新しい角度から掴むことができる。また、それを再確認する作業の一つとして、娘の捉えた両親との似より感をも重ね合わせるにより、さらに押さえがしっかりとできるはずである。少し残念なことではあったが、今回データが全て揃ったものは67組と少ないこともあり、これまでのように3群(大・中・小)による十分な比較は行えなかった。人数が少なくなるからである。そこで、思い切って2群(大・小)とし、父-母-娘の三者間のかかわり方を4領域(2×2のマトリックス)の中に位置付け、少々大雑把にはなるのだが、性格認知における世代間伝達の有無をそこから読み取ってみることにした。但し、これまでとの比較もいるので、3群による分析も併用している。

IIIの1. 似より感3群と2群の抽出

1990/1991年のデータにもとづく群分けは56項目をもとに仕分けしたが、ここでは4因子を構成している42項目で抽出を行った。区分③における項目数の出方の相関(r_s)は、0.97であったことは前述した。

七区分表示図を用いての似より感3群は、Fig. 8 の下に表記されている。3群の分け方は従来通りであるが、2群の出し方は平均値 (\bar{X}) 以上を大群、 \bar{X} 未満を小群とした。各々の組み合わせにおける \bar{X} (SD) は、母親と実父母：12.8 (7.3)，母親のみ「娘-自分-夫」：11.6 (6.8)，父親と実父母：12.8 (7.7)，父親のみ「娘-妻-自分」：12.3 (7.7)，娘のみ「自分-母親-父親」：13.7 (7.9) であった。



区分③に入った項目数で抽出した似より感3群

娘・自分・夫 (母親①)	実父母と自分 (母親②)	娘・妻・自分 (父親①)	実父母と自分 (父親②)
大群：32～15	31～16	大群：30～17	32～17
中群：14～8	15～8	中群：16～8	16～9
小群：7～0	7～0	小群：7～0	7～0

Fig.8 七区分表示図

III の 2. 両親のみた実父母と自分の似より感と「娘-自分-配偶者」の似より感について

母親と父親別にまとめたものが、Tab.3-1 と Tab.3-2 である。家族の構成員である配偶者と娘(用紙を持ち帰った学生)を認知をする場合には、自分の中に取り込んだ実父母との似より感と一致する人が多かった。「娘-自分-配偶者」の似より感が大の親(母親父親共に)は、実父母との似より感も大に評定した人が多数を占めている(母②大母①大 74.1%，父②大父①大 57.7%)。中中は母親 43.3%，父親 52.0%，小小の組み合わせにおいては母親 40.7%，父親 72.7% となった。

母親の小小群は、1990 / 1991 年に比べると出現数が減少している (62.2% → 40.7%)。しかし、小中群を加算してみると 88.8% となり、10 年前の 91.9% と差はみられない。114 人から 84 人と回答が少なくなったことも

大きな変化の原因の一つかもしれない。また、10 年という時代の差が影響してきているのだろうか。一方、大大群では 63.9% から 74.1% に微増した。

10 年前の調査では不思議な 23 という数字が出てきたが、今回も Tab.4 をみると、母親①大父親① (大・中)，母親①中父親① (中・小) それに母親①小父親① (中・小) は加算した時その 23 が存在する。単なる偶然の一致であろうが、面白いことではある。親子の似より感で捉えてきている性格の世代間伝達の信頼性はかなり高いと言えるかもしれない。

Tab.3 両親のみた性格認知関係①・②の似より感の出方

Tab.3-1 母親の捉えた性格認知			Tab.3-2 父親の捉えた性格認知		
娘・自分・夫 母親①	実父母と自分 母親②	n	娘・妻・自分 父親①	実父母と自分 父親②	n
大	大	20	大	大	14
	中	5		中	10
	小	2		小	1
中	大	7	中	大	8
	中	13		中	12
	小	10		小	5
小	大	3	小	大	3
	中	13		中	3
	小	11		小	16
母親①	母親②	n	父親①	父親②	n
大	大	32	大	大	28
	小	9		小	8
小	大	6	小	大	9
	小	37		小	27
		84			72

父親の場合には、「娘-妻-自分」の似より感が大の時、実父母との似より感は大と中を合わせると一人を除いた24人(96.0%)がそこに収まっている。小小群の72.7%と合わせ考えるならば、少なくとも一人の子ども(ここでは娘)と妻をみつめる家族関係の認知においては、父親にも世代間伝達があると言い切りたいものである。

IIIの3. 夫婦間における似より感の結び付きについて：分析1

Tab.4は、夫婦がどのような似より感の結び付きをしているのかを確かめるための表である。母親が大群で父親が小群という縁組は23.3%、母親が小群で父親が大群という状況は20.7%

Tab.4 母親と父親の「娘-自分-配偶者」の似より感における性格認知の関連性

3群：91組の場合

		父親①			母計
		大	中	小	
母親①	大	13	10	7	30
	中	9	13	10	32
	小	6	11	12	29
父計		28	34	29	91

2群：67組/91組の場合

		父親①	
		大	小
母親①	大	20/27	16/19
	小	12/15	19/30
			67/91

であった。逆に言うならば、多くのペアは実父母との似より感に近いと思っている者同士が夫婦生活を営み、子どもの一人である娘を育て見守ってきているといえるのではあるまいか。3群から2群に変えてみえ



Fig.9 母親と父親が捉えた性格認知の関係図式

てきたものは、2000/2001年に入手した67組の回答ではデータが少し片寄っているかもしれないということである。母親①大父親①大群と母親①小父親①小群の構成員で母親②と父親②も揃っていた数は、入手できた91組の全体の中での比率で見た時、かなり少なくなっていることに起因する。前者では74.1%、後者においては63.3%を満たす程度しかデータが得られていないということである。

もう一つ、父親と母親が醸し出す家族的(または家庭的)雰囲気は、この4因子で構成された性格認知からみた時、似たような実父母との似より感を抱えた者同士が親となり作り上げたものであるとまとめたいのだが、そのためには中群に入った者が大群や小群の特徴を合わせもち、それが中上では大群に、中下では小群の方に引き寄せられていることを証明していかななくてはならないだろう。今回は少し雑ではあるのだが、そのことにも挑戦できたかもしれない。 \bar{X} をもとにして大と小群を抽出したため、中上は大へ、中下は小へ組み込まれるはずだからである。

IIIの4. 両親別にみた似より感大群と小群の4因子における認知の差

ここでは、3群に分けた時の大群と小群で分析していくことにする。Fig.10は、実父母と自分自身の似より感と「娘-自分-配偶者」の似より感を別々に大群と小群のスクウェア・グラフでみたものである。両親が捉えた自分自身については、比較した人数に違いがあるため上段(②)と下段(①)に分け、有意差の有無を表記する工夫をした。母親では、実父母における

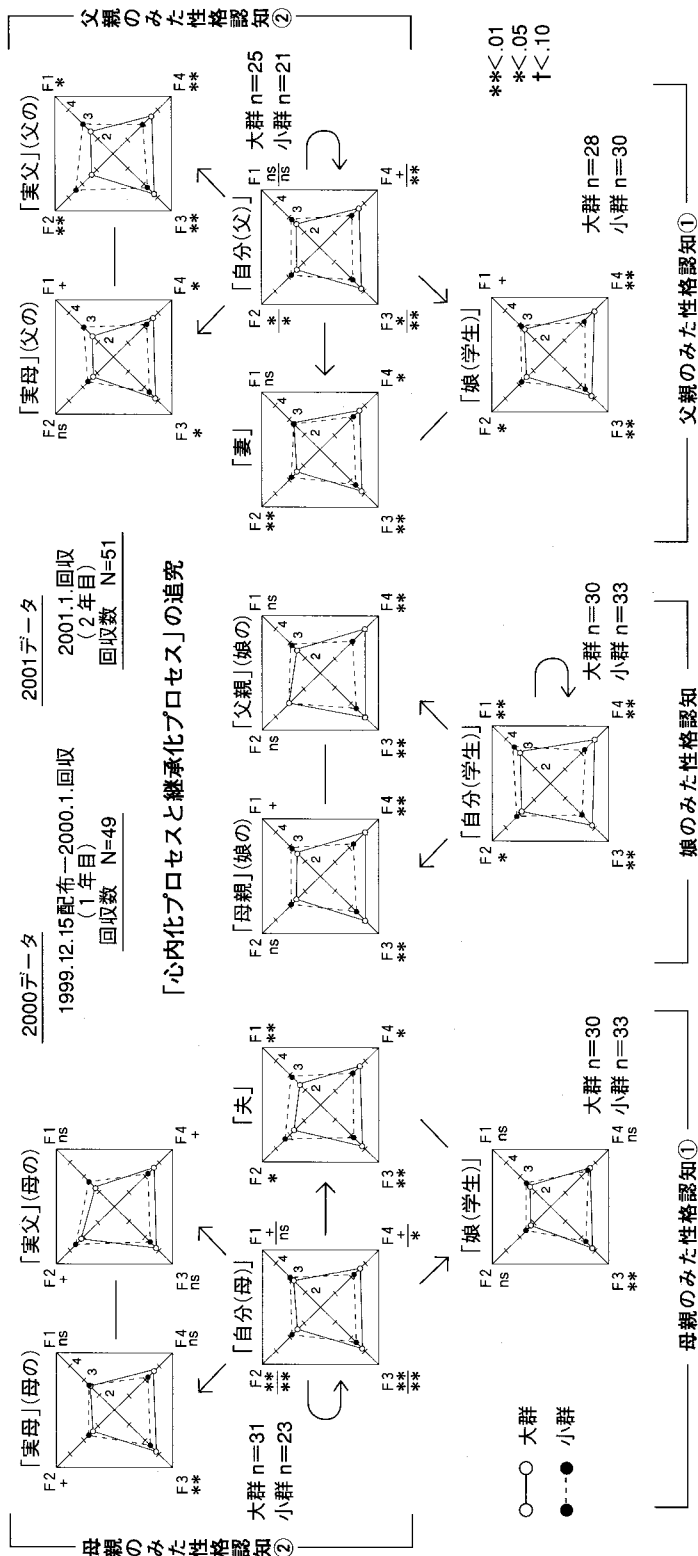


Fig. 10 13の組み合わせからみたら大群と小群のスクウェア・グラフ

—三者別々に2群を設定し検定したもの—

性格認知において前述のような差は得られなかったけれど、夫の認知においては有意な差が出た。父親では、実父母についても妻についてもはっきりとした有意な差がでている。ここには娘と母親の分析だけでは決して得られなかった興味深い結果がある。

大群と小群で有意な差をみせた因子を取り上げると、次のごとくである。

- 父親と母親がみた自分自身：共に F2 ~ F4 で有意な差あり。
- 夫婦としての相互認知：共に F2 ~ F4 / 妻→夫 F1 で有意な差あり。
- 父親の実父母に対する認知：共に F3・F4 / 実父 F1・F2 で有意な差あり。
- 父親のみた娘： F2 ~ F4 で有意な差あり。

娘からみた大群と小群（両親とは別に）の有意差も取入れながらみていくと、F2～F4の因子において、中でもF3 誠実性とF4 明朗性が、2群間の性格の受け止めの違いの決め手であることが分かる。「誠実性と明朗性」がこの一連の研究の群差（違い）を生み出す性格認知の二本柱なのかもしれない。

IIIの5. 夫婦間における似より感の結び付きについて：分析2

— 実父母と娘との結び付き（2×2のマトリックス）—

ここでは、両親の①と②の似より感さらに娘との似より感の出方を、67組の母親①と父親①の2群（大群と小群）を組み合わせた、2×2のマトリックス表を用いて示してみたい。4つの領域の中には、母親②／父親②の2群の現れ方（人数）と、娘からみた「自分-母親-父親」の2群の人数を同時に書き込んでいる。領域1と領域4は夫婦が共にお互いを見つめる仕方が似ているというペア群で、ある質的な面で性格的に似たもの夫婦であるといえようか（合わせた出現率は58.2%）。母親②、父親②、娘のいずれにおいても同じように、領域1（大>小）、領域4（大<小）となっており、共通して両親の似より感が高いかまたは低いと家族間の性格認知をしているといえよう（Tab.5）。

Tab.5 母親①と父親①の2群をもとにして作成した2×2のマトリックス内に位置付けた両親の②と娘の似より感の現れ方（単位：人）

		父 親 ①						計					
		大 群			小 群								
母 親 ①	大 群	1	母親②	父親②	娘	2	母親②	父親②	娘	母親②	父親②	娘	
		大	16	15	14	大	12	3	5	大	28	18	19
		小	4	5	6	小	4	13	11	小	8	18	17
	小 群	3	母親②	父親②	娘	4	母親②	父親②	娘	母親②	父親②	娘	
		大	2	10	8	大	2	6	5	大	4	16	13
		小	10	2	4	小	17	13	14	小	27	15	18
計		母親②	父親②	娘		母親②	父親②	娘	母親②	父親②	娘		
	大	18	25	22	大	14	9	10	大	32	34	32	
	小	14	7	10	小	21	26	25	小	35	33	35	

これに対し、領域2と領域3の似より感、ズレている夫婦のようである。この場合、夫婦別にみると、各々は実父母との似より感を自分の家族を見る①と一致させている者が多いのであるが、この夫婦間の認知の違いをお互いが補完し合って生活してきているのかもしれない。このような組み合わせの夫婦の場合に娘に影響を与えている存在者は、どうも父親のようである。

つまり、母親にではなく父親のそれに三者間の認知を似せている娘（青年期にある学生）が多いのである。これはこの度の分析から浮かび上がってきた新しい事実である。

III の 6. 両親の②と①の組み合わせと娘の 2 群の出方について

もう少し突っ込んで分析を試みようと思う。群の組み合わせの順は、母親②父親②／母親①父親①：娘である。 大大／大大：娘（大 10・小 3） 大小／大小：娘（大 3・小 7）

小大／小大：娘（大 6・小 2） 小小／小小：娘（大 3・小 8）

この 4 つの領域に全体の 62.7% が収まった（ここでは $2 \times 2 \times 2 \times 2$ のマトリックスになるので、1/4 の領域で全体の約 2/3 の出現となる）。似たもの夫婦と娘、ズレている夫婦と娘の特徴がさらにクリアーとなった。女子学生にとっては、父親に対する認知的な受け止め方・あり方が、自己の確立において大きなテーマになる可能性を秘めているようである。

これを別の側面から検証するためにスピアマンの順位相関を出してみた。この表からも、母親と父親の①と②には高い相関関係があることが分かる。また、娘の似より感は父親のそれとゼロとは言えない関係にあることが確かめられている (Tab. 6)。

Tab. 6 三者共通区分 (区分③) の個数でみた 5 種の似より感におけるスピアマンの順位相関 (rs)

	母親①	父親①	母親②	父親②	娘
母親①					
父親①	0.15				
母親②	0.67**	0.12			
父親②	0.17	0.60**	0.20		
娘	0.12	0.29*	0.21	0.30*	

母親① : 娘-自分-夫 の 区分③の個数
 父親① : 娘-妻-自分 の 区分③の個数
 母親② : 自分-実母-実父の区分③の個数
 父親② : 自分-実母-実父の区分③の個数
 娘 : 自分-母-父 の 区分③の個数

青年期の娘にとって父親との望ましい関係とはいかなるものなのだろうか。これからは、娘の人格形成における父親の取り込み方が問われてくる。内なる他者として

父親をどのように心の中に位置付けてきているかということなのである。人生の第①段階では密着化していた母子の関係から、人生の第②段階に達した娘の心に父親がどのように切込み、影響を及ぼしていくのかということを探る入口が目の前に現れてきた。これは本当にすごいことになったものである。親子の似より感研究は、『似よることとズレること』という一回り大きな上位概念の中でさらに重要な位置を占め、人生を見通しながら、対人関係・人と人とのかわり方にも裾野を広げ、拡大化していくものとなってきたといえるのではあるまいか。これは、個性化と社会化が同時進行であり、霜山のキーワードである「その人のまわりに立ちこめた雰囲気」と「適正距離」・「まなざし」に近づいていくことに通じていく。一対一の因果関係を探るだけではない、多層的な捉え方の必要性がここにおいてははっきりと垣間みえてきた。

今年の 8 月に開催された日本教育心理学会第 45 回総会のあるシンポジウムで、亀口憲治氏は家族療法をもとにしたこれまでの数多くの実践から、“三世代を語らずして治療はできない”と述べられた。期を一にして基礎研究と臨床実践が今ここで交差した（「而今」）という実感を味わったものである。

〈私〉は、〈関係において〉と同時に〈プロセスとして〉理解されうるものである。

〈私〉は、つねに可能性として存在しているのである。

〈私〉の在り方は、〈私〉それ自身の中に隙間があり、ズレがあるのでなくてはならない。

これは、西平（1986）の考え方である。また、故早坂泰次郎氏は、「関係性」にこだわり続けた（1979, 1994）。親子の似より感のような「内なる」関係だけによって関係性を語ることは、主観主義ではないかと指摘されてから6年の月日が流れた。人生を三段階で捉えようとする筆者の理論が、この主観主義を脱してきているかどうかはまだよく分からない。似よることとズレることの比率で構築した理論であるが、今年になり授業のために手にした塚野（2000）のテキストの中に、この社会化の発達と個性化の発達という記述をみつけた。改めてこのキーワードに触れて、この角度からの追究も秋山モデルの考察に付け加えることができるという感触を持てるようになっている。これが親子の似より感の研究を包含できるさらなるメタ認知次元分野の開拓へとつながっていくことを期待している。一人ひとりが、親子の似より感の位置付けを人生の第①段階でどのようにセットしたかによって、その後の人生の第②・③段階に大きな影響を、違いをもたらし続けていくことになる。

河合（1996）は、中年クライシスの中で「父母既死以後の親子関係」の大切さを取り上げている。

親が死んでも、その「関係」が消滅したりはしない。それは意外に続いており、しかも、変化していくのである。中年になってからすでに亡くなった両親と自分との「関係」が変化するのを感じる人は多いのではないだろうか。両親の保護を受けず、経済的に独立し、結婚して子どもを育てる。これは三十歳の「自立」である。このような一応の自立のあとで、人間はそれほど自立しているものではないことを、中年になると自覚してくる。そして、深い孤独の体験とともに、いろいろな「関係」の見直しが迫られる。こんなときに、まったく忘れていた両親との関係などが生き生きと思い出されるのである。（P.35・36）

人間は近代になって、とくに科学技術が発展して以来、誤りを犯すようになってきたらしい。科学の対象としている現実は一ひとつであっても、現実そのものももっと多層的であり、そこに唯一の正しい現実があるのではない。その多層的な現実をどのように知り、どう折り合いをつけるかという困難な仕事をするのが、中年なのである。ここのところがうまくいかないと、青年のままで年をとるので、老いや死を迎えるのが大変なことになってくる。（P.38・39）

この一年間の学びの中で、強く心を捉えた河合の考え方である。「現実そのものは、多層的である」という把握の仕方は、もう一つ概念である『生起閾値』と結び付いてくる。竹内（2001）の「人が成長するのは、一段一段階段を上がっていくようなわけにはいかない。ある瞬間、全力をふるって一つの淵を飛び越える、あるいはよじ登らなければならないだろう（P.213）」は、前回に紹介したものであるが、心の情動レベルにも焦点化させてみた場合、親子の似より感研究はさらなる飛躍を遂げるように思われる。それは、similarity という単なる認知レベルから resemblance という認知・情動レベルへとシフトしていくからである。慎重にこれからも研究の歩みを続けていきたい。さらに二つのことにも触れておきたい。かなり前から気になっていたのであるが、哲学者小川（2002）の集合心性論と清水（1994）の『場の力』である。小川のこの新しい現象学は、「人間は状況のなかに、環境のなかに、なによりも雰囲気の中に生きる」というもので、『環境を見つめる知』を提唱しているのである。2002年の論文では“真

空のエネルギー”という視点が宇宙学をさらに押し進めるのに貢献したことを取り上げた。現在われわれが用いているキーワードだけでは考察し切れていない心の空間が、まだまだ大きく存在しているように思われてならないのである。

最後は、42年間心理学を学びながらいつの間にか身に付いてきた、一つの見方・考え方で締めくくろうと思う。これは、12月に担当する本学での3度目の公開講座（その最後の講演）のパンフに記載したものである。やっとここまで歩みを続けて今の自分が存在している。

心理学からみた心構えと心配りのあり方 — 発達臨床学から眺めてみよう！ —

私達はこの世に人間として誕生し、人間としての生き方・学び方を積み重ねてきている。この人生の道行きの中で私達はどのような心構えを身につけてきたのだろうか。また、人と人のかかわり方に関係する心配りをどのように実践してきているのだろうか。人間は知の心と情意の心を持っている。この2つの心の働き合いに焦点を当てながら、最後の学習テーマに挑戦してみたい。温かい雰囲気に取り込まれたらこの講義は成功したことになる。

文 献

- 秋山幹男 1991 家族関係（第8章） 今泉信人・南 博文編 人生周期の中の青年心理学 北大路書房 108-122
- 秋山幹男 1992 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1993 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育（広島文教女子大学教育学会）7 29-48
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1995 親子の似よりと家族イメージ・エゴグラム 日本性格心理学会第4回大会発表論文集 100-101
- 秋山幹男 1995 親子の似よりと自己形成・自己意識 日本心理学会第59回大会発表論文集 31
- 秋山幹男 1995 発達心理学からみた子どもの問題（公開レクチャー講義録） 広島文教女子大学教育相談センター年報 2 9-27
- 秋山幹男 1997 親子の似より（感）の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 秋山幹男 1998 親と子のかかわり（第4章） 神原雅之・秋山幹男・有馬比呂志編著 心をはぐくむ幼児教育 溪水社 56-74
- 秋山幹男 1998 「内なる他者」を見つめる目 広島文教女子大学紀要 33 103-117
- 秋山幹男 1998 成人女性（母親）の実父母との似より感について—女子学生をもつ母親の性格認知— 日本心理学会第62回大会論文集 37
- 秋山幹男 1998 成人女性のみた夫・自分・娘の性格認知 —実父母との似より感をベースにした分析— 日本性格心理学会第7回大会発表論文集 78-79
- 秋山幹男 1999 女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知 —似より感とズレ感をもとにした分析— 広島文教女子大学紀要 34 41-54
- 秋山幹男 1999 母親と娘（学生）の捉えた三者間認知 —「夫-自分-娘」と「父-母-自分」の似より感を中心に— 日本性格心理学会第8回大会発表論文集 88-89
- 秋山幹男 2000 若い母親の養育態度と親子（幼児）の性格認知—実父母との似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 35 113-126
- 秋山幹男 2001 女子学生をもつ父親と母親における「娘・自分・配偶者」の似より感 —実父母との似より感も合わせた性格の世代間伝達について— 日本性格心理学会第10回大会発表論文集 110-111
- 秋山幹男 2001 時間軸と空間軸からみた自己の定位—女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 36 63-82
- 秋山幹男 2002 心理学的健康と時間軸にそった自己意識 —女子学生の親子の似より感をベースにして—

- 広島文教女子大学紀要 37 145-163
- 秋山幹男 2003 発達心理学から見た子どもの問題 藤土圭三・秋山幹男・中丸澄子・小早川久美子編著
地域に生きる心理臨床 北大路書房 235-243
- 秋山幹男 2003 両親の実父母との似より感と家族間の性格のかかわり方 —女子学生とその両親について— 日本心理学会第67回大会発表論文集 60
- エリクソン, E. H. 仁科弥生訳 1977/1980 幼児期と社会 I・II みすず書房 Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society* W.W. Norton & Company, Inc.
- 早坂泰次郎 1979 人間関係の心理学 講談社
- 早坂泰次郎 1994 〈関係性〉の人間学 川島書店
- 河合隼雄 1996 中年クライシス 朝日新聞社
- 西平 直 1986 〈私〉をどう理解するか—H. ワロンの〈内なる他者〉を手掛かりにして— 東京大学教育学部紀要 26 197-205
- 小川 侃 2002 オイコソフィアとしての哲学 毎日新聞 2002.2.9.
- 清水 博 1994 規定不能性 1989.12.27 河合隼雄対話集 87-127 三田出版会
- 霜山徳爾 1978 人間の詩と真実—その心理学的考察— 中央公論社
- 竹内敏晴 2001 思想する「からだ」 晶文社
- 塚野州一 2000 人々とのつながりを求めて (第2章第1節), 自分をつくる (第5章第1節) 塚野州一編著 みるよむ生涯発達心理学 31-37, 110-115 北大路書房

資 料

資料1

親子の似より感調査の性格項目

- F1. 内向性 (12項目): しょげやすい 臆病な 感傷的な (オセンチな) 意志の弱い 甘えた ロマンチックな 行動力のある (-) 他人を気にする 指導力のある (-) スケールの大きな (-) 内気な 服従的な
- F2. 自己顕示性 (9項目): 利己的・自己中心的な 支配欲の強い 強がり うぬぼれの強い わがままな ひねくれた 頑固な 虚栄心の強い 粗暴な
- F3. 誠実性 (14項目): 礼儀正しい ねばり強い 几帳面な ひたむきな ものを深く考える 包容力のある 正義感の強い 献身的な 親切な やさしい なげやりなところのある (-) 無責任な (-) あきっぱい (-) 調和のとれた
- F4. 明朗性 (7項目): 明るい ユーモアのある 友人の多い さっぱりした 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ 孤独な (-)
- その他 (6項目): しつと深い 不安定な 神経質な (線の細い) 疑い深い (不信の) (毎日の生活に) 生きがいを感じる 素直な 2000/2001

理想主義的な ヒステリックな 趣味の広い ニヒルな 体の強い 独立心の強い 宗教的な 古いものの考え方をする 1990/1991

成人における実父母との似より感

資料 2

母親 ①

群	n	娘				自分自身				夫				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大	MEAN	30	2.52	2.25	3.84	3.71	2.89	2.38	3.74	3.48	2.38	2.69	3.90	3.53
	SD		0.37	0.58	0.33	0.58	0.60	0.53	0.42	0.70	0.34	0.70	0.43	0.57
小	MEAN	33	2.72	2.52	3.55	3.34	3.10	2.79	3.32	3.10	2.79	3.17	3.24	3.16
	SD		0.49	0.54	0.42	0.62	0.39	0.43	0.42	0.51	0.58	0.78	0.68	0.63
全体	MEAN	95	2.67	2.38	3.69	3.70	3.03	2.59	3.46	3.27	2.58	2.90	3.56	3.31
	SD		0.44	0.57	0.42	0.54	0.50	0.53	0.46	0.62	0.49	0.73	0.63	0.63
t検定	大対小		ns	ns	0.01	ns	ns	0.01	0.01	0.05	0.01	0.05	0.01	0.05

父親 ①

群	n	娘				妻				自分自身				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大	MEAN	28	2.61	2.43	3.88	3.89	2.72	2.35	3.92	3.61	2.66	2.59	3.77	3.57
	SD		0.52	0.60	0.50	0.53	0.52	0.61	0.50	0.64	0.52	0.56	0.39	0.69
小	MEAN	30	2.87	2.81	3.43	3.40	2.71	2.93	3.29	3.24	2.91	2.96	3.43	3.11
	SD		0.38	0.45	0.32	0.60	0.42	0.53	0.30	0.39	0.46	0.50	0.27	0.35
全体	MEAN	92	2.76	2.57	3.63	3.57	2.72	2.68	3.54	3.38	2.77	2.75	3.57	3.34
	SD		0.47	0.54	0.44	0.61	0.46	0.61	0.47	0.57	0.53	0.59	0.42	0.60
t検定	大対小		+	0.02	0.01	0.01	ns	0.01	0.01	0.05	ns	0.05	0.01	0.01

母親 ②

群	n	自分自身				実母				実父				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大	MEAN	31	2.91	2.44	3.72	3.41	2.74	2.36	3.94	3.40	2.53	2.58	3.78	3.46
	SD		0.51	0.52	0.45	0.73	0.46	0.56	0.40	0.78	0.49	0.55	0.59	0.69
小	MEAN	23	3.20	2.88	3.18	3.03	2.84	2.69	3.59	3.12	2.71	2.95	3.54	3.13
	SD		0.48	0.41	0.47	0.51	0.34	0.58	0.43	0.48	0.49	0.73	0.53	0.37
全体	MEAN	84	3.04	2.62	3.48	3.27	2.77	2.45	3.81	3.31	2.60	2.72	3.70	3.34
	SD		0.51	0.54	0.47	0.62	0.41	0.60	0.43	0.66	0.48	0.72	0.53	0.61
t検定	大対小		+	0.01	0.01	+	ns	+	0.01	ns	ns	+	ns	+

父親 ②

群	n	自分自身				実母				実父				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大	MEAN	25	2.72	2.62	3.72	3.53	2.54	2.44	3.88	3.56	2.50	2.40	3.84	3.53
	SD		0.52	0.51	0.44	0.54	0.57	0.69	0.53	0.59	0.49	0.46	0.47	0.67
小	MEAN	21	2.97	3.00	3.38	3.18	2.86	2.71	3.50	3.10	2.90	3.28	3.25	2.91
	SD		0.49	0.50	0.33	0.46	0.35	0.67	0.37	0.55	0.46	0.59	0.48	0.62
全体	MEAN	74	2.78	2.82	3.59	3.40	2.79	2.60	3.68	3.27	2.59	2.87	3.60	3.23
	SD		0.55	0.59	0.41	0.61	0.52	0.76	0.50	0.63	0.52	0.75	0.57	0.70
t検定	大対小		ns	0.05	0.02	+	+	ns	0.02	0.05	0.02	0.01	0.01	0.01

娘

群	n	自分自身				母親				父親				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大	MEAN	30	2.96	2.89	3.79	3.97	2.49	2.59	4.03	3.95	2.34	2.92	4.05	4.08
	SD		0.55	0.61	0.42	0.57	0.59	0.70	0.51	0.58	0.71	0.90	0.57	0.66
小	MEAN	33	3.38	3.27	3.09	3.25	2.78	2.88	3.56	3.26	2.61	3.04	3.41	3.42
	SD		0.46	0.42	0.42	0.58	0.43	0.64	0.47	0.58	0.40	0.82	0.62	0.62
全体	MEAN	98	3.12	3.12	3.44	3.62	2.62	2.74	3.81	3.64	2.44	3.01	3.77	3.66
	SD		0.54	0.57	0.50	0.67	0.55	0.69	0.52	0.65	0.59	0.85	0.67	0.73
t検定	大対小		0.01	0.02	0.01	0.01	+	ns	0.01	0.01	ns	ns	0.01	0.01

資料3

母親①

群	n	娘				自分自身				夫				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大大	MEAN	20	2.51	2.29	3.88	3.87	2.98	2.46	3.65	3.40	2.36	2.94	3.93	3.51
	SD		0.39	0.64	0.36	0.54	0.56	0.58	0.53	0.74	0.42	0.77	0.49	0.72
小大	MEAN	12	2.52	2.35	3.67	3.92	2.95	2.73	3.51	3.33	2.36	2.79	3.48	3.20
	SD		0.45	0.42	0.45	0.46	0.19	0.46	0.40	0.39	0.53	0.69	0.68	0.74
大小	MEAN	16	2.63	2.39	3.69	3.64	2.99	2.52	3.63	3.38	2.66	2.66	3.60	3.23
	SD		0.37	0.72	0.40	0.57	0.53	0.63	0.47	0.65	0.43	0.56	0.58	0.59
小小	MEAN	19	2.82	2.53	3.53	3.70	3.09	2.87	3.22	3.05	2.87	3.19	3.43	3.42
	SD		0.49	0.57	0.36	0.40	0.52	0.34	0.41	0.43	0.57	0.70	0.54	0.47
テューキイ	大大・小小		*				*				*			
P<0.05	小大・小小										*			
	大小・小小						*							

父親①

群	n	娘				妻				自分自身				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大大	MEAN	20	2.72	2.44	3.81	3.65	2.65	2.53	3.76	3.35	2.60	2.81	3.79	3.58
	SD		0.56	0.58	0.50	0.62	0.66	0.66	0.55	0.73	0.60	0.61	0.43	0.66
小大	MEAN	12	2.45	2.46	3.91	3.89	2.79	2.39	3.86	3.65	2.52	2.53	3.63	3.72
	SD		0.35	0.53	0.48	0.56	0.41	0.63	0.56	0.62	0.46	0.59	0.41	0.61
大小	MEAN	16	2.85	2.76	3.51	3.31	2.74	2.99	3.43	3.34	2.94	2.95	3.44	2.95
	SD		0.32	0.57	0.33	0.60	0.50	0.49	0.32	0.54	0.57	0.55	0.31	0.41
小小	MEAN	19	2.89	2.78	3.51	3.53	2.83	2.79	3.33	3.16	2.94	2.94	3.44	3.42
	SD		0.51	0.38	0.29	0.57	0.24	0.55	0.28	0.36	0.46	0.50	0.41	0.52
テューキイ	大大・大小										*			
P<0.05	小小										*			
	小大・大小		*								*			
	小小										*			
	大小・小小										*			

母親②

群	n	自分自身				実母				実父				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大大	MEAN	20	2.98	2.46	3.65	3.40	2.98	2.45	3.96	3.31	2.74	2.87	3.80	3.42
	SD		0.56	0.58	0.53	0.74	0.48	0.62	0.40	0.82	0.51	0.68	0.49	0.64
小大	MEAN	12	2.95	2.73	3.51	3.33	2.82	2.41	3.75	3.25	2.47	2.78	3.61	3.39
	SD		0.21	0.46	0.40	0.39	0.29	0.47	0.38	0.44	0.49	0.56	0.45	0.53
大小	MEAN	16	2.99	2.52	3.63	3.38	2.68	2.43	3.86	3.28	2.51	2.44	3.72	3.44
	SD		0.53	0.63	0.47	0.65	0.39	0.71	0.40	0.77	0.45	0.45	0.67	0.70
小小	MEAN	19	3.09	2.87	3.22	3.05	2.76	2.41	3.79	3.27	2.62	2.84	3.68	3.13
	SD		0.52	0.34	0.40	0.43	0.38	0.62	0.48	0.52	0.55	0.95	0.55	0.60
テューキイ	大大・小小		*											
P<0.05	大小・小小		*											

父親②

群	n	自分自身				実母				実父				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大大	MEAN	20	2.60	2.81	3.80	3.58	2.61	2.67	3.73	3.48	2.42	2.61	3.76	3.39
	SD		0.60	0.61	0.42	0.66	0.68	0.91	0.58	0.73	0.49	0.50	0.56	0.52
小大	MEAN	12	2.52	2.53	3.63	3.71	2.77	2.18	3.93	3.16	2.37	2.79	3.81	3.46
	SD		0.46	0.59	0.41	0.59	0.21	0.71	0.48	0.43	0.60	0.80	0.59	0.68
大小	MEAN	16	2.94	2.94	3.44	2.95	3.10	2.68	3.37	3.05	2.73	3.08	3.36	2.86
	SD		0.57	0.54	0.31	0.41	0.46	0.68	0.51	0.57	0.48	0.89	0.48	0.70
小小	MEAN	19	2.94	2.94	3.44	3.42	2.70	2.71	3.74	3.35	2.76	3.02	3.51	3.22
	SD		0.46	0.50	0.41	0.52	0.37	0.59	0.30	0.59	0.47	0.76	0.59	0.84
テューキイ	大大・大小		*				*							
P<0.05	小小		*											
	小大・大小						*							
	大小・小小										*			

娘

群	n	自分自身				母親				父親				
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	
大大	MEAN	20	3.07	3.03	3.64	3.65	2.60	2.77	3.90	3.69	2.31	3.24	4.00	3.83
	SD		0.48	0.7	0.37	0.61	0.53	0.79	0.42	0.63	0.63	0.98	0.44	0.65
小大	MEAN	12	2.86	3.16	3.57	4.01	2.42	2.61	3.97	3.69	2.25	3.09	3.82	3.97
	SD		0.61	0.62	0.42	0.53	0.54	0.89	0.70	0.66	0.52	0.71	0.58	0.51
大小	MEAN	16	3.17	3.2	3.22	3.25	2.63	2.54	3.80	3.59	2.47	2.88	3.61	3.34
	SD		0.66	0.71	0.60	0.52	0.58	0.64	0.45	0.40	0.71	0.88	0.53	0.48
小小	MEAN	19	3.18	3.2	3.31	3.67	2.63	2.86	3.70	3.51	2.50	2.85	3.80	3.78
	SD		0.45	0.56	0.43	0.64	0.50	0.68	0.45	0.56	0.38	0.86	0.61	0.70
テューキイ	大大・大小		*											
P<0.05	小大・大小													
	大小・小小										*			